特集

「いいムラ」らしい幸せのカタチ











「豊かさ」って何だろう?

人は、お金があることだけで幸せになれるのでしょうか。まちは、人口が増えれば発展して豊かになったと言えるでしょうか。

もちろん、暮らしの安心や便利さは大切です。働く場所があり、必要なサービスを受けられ、安心して子育てができ、学校で学ぶことができ、いつまでも元気に過ごせること。こうした環境は、誰もが自分らしく生きるための土台となります。

しかし、本当の豊かさや幸せは、お金や物、サービスのように量や数字だけで測れるものではありません。家族や友人と過ごす時間、好きなことに挑戦できる喜び、困ったときに頼れる人の存在、そして、自分の行動が誰かの役に立っているという実感。そうした人との温かなつながりや、自分らしくいられる居場所も、私たちの暮らしを豊かにする大切な要素です。

みんなで「いいムラ」をつくろう

では、どうしたら誰もが幸せを感じられるまちになるのでしょうか。一人ひとり経験や考え方が異なるからこそ、さまざまな個性が出会い、互いを認め合いながら、共により良いまちをつくっていく。その日々の積み重ねの先に、誰もが自分らしく、心豊かに暮らせる「いいムラ」があるのではないでしょうか。

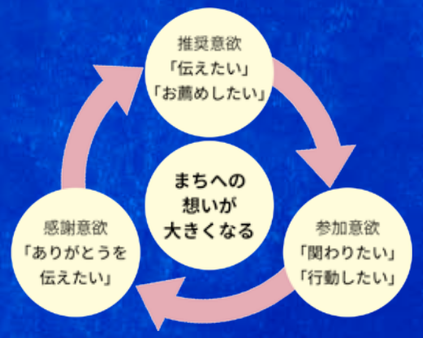
今号は、そんな想いがつまったブランドメッセージ「いいムラをつくろう とうかいむら」をひも解きます。

今月の表紙



スマホクリエイターズLab.
5期生の皆さん。
まちや人を取材し、フリーペーパーとしてまとめます。
「人と関わるのが楽しくなった」「人に魅力を話せるのがうれしい」と話します。

“地域に真剣（マジ）になる人（まち）”が育つ循環

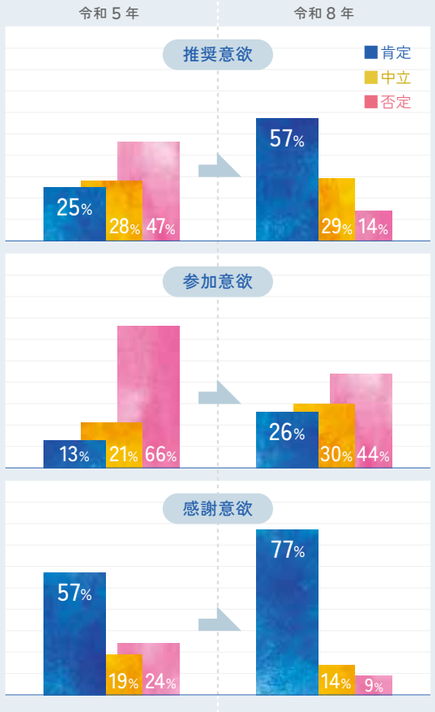


「推奨」「参加」「感謝」の３つの意欲が相互に高まることで、一人ひとりの地域への愛着と当事者意識が育まれます。この循環を通して、村に関わり、魅力を伝え、未来へとつないでいく人が増えていくのです。

村に愛着がある人、増えています！

「推奨」「参加」「感謝」の３つの意欲とも高いと答える人の割合が伸びていることから、村に愛着があり、“いいムラをつくろう”という気持ちを持つ人の輪が広がっていることが分かります。

村のシティプロモーションおよび情報発信についてのアンケート調査



いいむら HISTORY

新しいつながりを創り出す“いいムラ”の歴史

「いいムラをつくろう とうかいむら」には、人や文化の違いを認め合い、共に未来をつくるという想いが込められています。その根底には、村が長い時間をかけて育んできた「新しい人や文化を受け入れる風土」があります。この風土はいかにして生まれたのでしょうか。歴史をたどり、その根源をのぞいてみましょう。
歴史と未来の交流館では、時代の流れとともに村で育まれてきた交流の足跡を展示しています。

縄文時代

文化が混ざり合う拠点
― 新しい伝統の誕生 ―

土器は、作られた年代や地域によって、形や文様の特徴に違いがあります。

村の遺跡からは、関東地方や東北地方など、複数の地域の特徴が混ざり合った「折衷型」の土器が見つかっており、当時の人々の交流の跡が見て取れます。



古墳時代

交流する水辺の拠点
― 海を超えたつながり ―



村内の古墳からは、東海地方産の須恵器や島根県産の碧玉製管玉（へきぎょくせいくだたま）、九州地方を中心に分布するイモ貝装の馬具が見つかりました。

水路や陸路を利用して運ばれてきたようで、広範囲に交流していたことがうかがえます。

室町時代

人と物が行き交う拠点
― 多彩な生業が紡ぐ繁栄 ―

海辺では、塩づくりや漁業、鹿の角や貝を使った加工品（なりわい）づくりなどの多彩な生業の跡や、国内外から入ってきた陶磁器・鉄製品なども見つかりました。

全国から多くの人や物が集まり、交易の場として栄えていたことが分かります。


中国からの輸入磁器・肥前産の陶器


魚を取る重り

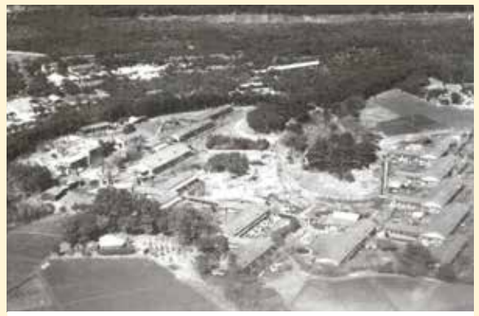

貝で作る漆喰の材料

村松晴嵐荘

最先端医療を支える矜持
― 医師がいない村の近代化と融和 ―

特効薬がなく、不治の病と恐れられた「結核」への対策として、①広い土地②良好な気候③東京に近い――という好立地の村に、日本で初めて国立結核療養所「村松晴嵐荘」が創設されました。

「村松晴嵐荘」は、医師がいない村に医療をもたらします。医師・看護師やその家族が集まり、雇用が生まれ、商店や道路が整備されるなど、経済効果や新たな交流が生まれました。リハビリとして職業訓練を行った患者の中には、退院後に村へ移り住む人々がたくさんいました。



医者が入ってくることによって、その子どもたちや家族も村に入ってくる。
そうして地元の子どもたちと一緒に学ぶことによって、教育の面が良くなるだろう。


照沼家提供

照沼 信忠 村長（当時）

※歴史と未来の交流館基本展示解説シート7「第6章 開かれたムラの物語」から引用

原子力研究の拠点

最先端研究と歩む覚悟
― 原子の火がつなぐ新たな交流 ―



最初のころは、村の人間とは違うんだという意識が新しく入ってきた人にあったようですね。
でも主婦の場合は、子供の学校でのつきあいを通して、溶け込むのにそれほど時間はかからなかったようですね。


西野 いくさん

※「東海村発足30周年記念誌」から抜粋

第二次世界大戦後、原子力を平和利用する機運が高まり、村に日本初となる日本原子力研究所が設置されました。また、東海研究所の研究用原子炉（JRR−1）が臨界に達し、原子力研究の拠点として歩み始めます。

関連事業所の設置も進んだことで、人口が増え、道路や上下水道、学校などが整備されました。社宅や団地を村内に分散して造成したことで、新旧の子どもたちが同じ学校で学び・交流するようになり、地域に一体感が生まれました。

現代の東海村の礎「村松晴嵐荘」

昭和初期、日本人の死因第1位で不治の病と恐れられた結核。各地で結核療養所の建設反対運動が起きる中、東海村の人々は、「国の発展のためになる」と、全国初の国立結核療養所「村松晴嵐荘」を受け入れる決断を下しました。しかし当初は、恐怖から施設を敬遠する住民も少なくありませんでした。

一方、医師や看護師は、結核以外の診療や往診、衛生指導、予防接種などで村に貢献しました。住民との距離は次第に縮まり、村の人々が野菜や魚を売りに行くなど交流も活発になりました。こうして村松晴嵐荘と地域社会は共存共栄の道を歩み始めたのです。

また村松晴嵐荘では、若い患者が治療の一環として時計修理や理容、放射線技術などを習得する「作業療法」が行われていました。退院後、技術を生かして東海村に定住する人も少なくありませんでした。こうした交流を通じて、「新しい人や技術を受け入れ、共に発展する風土」が育まれていったのではないでしょうか。

interview


「村松晴嵐荘」や「原子力」を研究
常磐大学総合政策部
総合政策学科 教授
砂金 祐年さん

受け継がれた挑戦と融和

医療の向上と新たな人材の定着は、「国の最先端医療を支えている」というシビックプライドにつながったと考えられます。その後、特効薬の登場で結核が治る病気になると、村松晴嵐荘の結核療養所としての役割は縮小していきました。やがて東海村は、「原子力研究所」の設置という転機を迎えます。原子力も未知の技術でしたが、東海村では大きな反対運動が起きなかったと言われています。新しい人や技術とともに発展した経験が、原子力研究所の受け入れにも影響したのかもしれません。そして「未来の最先端技術を支える」という新たなシビックプライドも醸成したのではないでしょうか。

研究者や技術者が家族と共に移住した東海村は、教育環境の整備に注力しました。教育環境が充実し、子どもたちが一緒に学ぶ中で、子どもから親へと交流の輪が広がりました。こうした取り組みは、新住民を「一時的な来訪者」ではなく「村の一員」として受け入れ、融和する好循環を生み出したと考えられます。東海村の際立った特徴の一つです。

「受け入れる力」の循環がまちをつくる

村松晴嵐荘から原子力へ。変化を恐れず、最先端の科学や文化を迎え入れ、共に発展してきた東海村。世代や時代を超えて「新しい人や文化を受け入れ、共に発展する」好循環が受け継がれてきたことが、現在の「人が温かく、多様性を認め合うまち」という東海村の姿につながっているのではないでしょうか。



歴史を受け継いだ “いいムラ”の現在地

いいムラをつくろう とうかいむら

時代が変わっても、村には「新しい人や文化を受け入れる」という温かな空気が流れ続けています。その土壌があるからこそ、若い世代の挑戦を応援する場や、世代を超えて対話するプロジェクトが次々と生まれています。

わかもののまちづくり

高校生まちづくりスクール／わかもの会議／県立東海高等学校との連携／こども・わかものの声を聴く

若い世代が「何を感じ、何を考えているのか」に耳を傾け、「やりたいこと」に挑戦できるよう、そっと背中を押します。

やってみたいことに挑戦しながら村に関われるって、なんかすごく良い！











情報発信

広報紙／公式LINEリニューアル

人にスポットを当て、想いを伝える特集記事を掲載。人の想いからまちを「知る」「共感する」「行動する」の循環を生み出します。公式LINEのお友だちは、１万4,900人を超えました。１世帯に１人は登録している姿を目指しています。

村で活躍している人が紙面に登場するので、いつも楽しみです。



















ワークショップ

住民参加型／企業向け／高校生向け／職員向け

まちの魅力と個性を掛け合わせると、まちづくりの担い手としてどんなことができるのかを考えます。







対話をして、みんなでまちのことを考えるのって楽しいですね！

つながるプロジェクト〈T-project〉

場づくりスクールTAKE!／つながるトーク／スマホクリエイターズLab.

まちづくりに熱い人の話を聴いて・対話して・発信して、積極的にまちづくりに関わる雰囲気をつくります。

熱い思いを持っている人がたくさんいることに驚きました。







活動に参加してみたら、やりたいことが見つかって、新たな居場所ができました！



地域（まち）に真剣（マジ）になる きっかけは小さな「やってみよう」

昔むかし、東海村の地は深い海の底にありました。やがて陸地となり、南北には川が流れ、東には太平洋を望む「水辺のムラ」として栄えました。豊かな水辺の恵みに支えられたムラは、各地から集まった人々が交流・交易を重ね、多彩な文化を育んでいきます。

未知への挑戦を恐れず、新しい人や文化とともに歩んできた村に、「多様な人や文化を温かく迎え入れる風土」が生まれたこともあり、国立結核療養所「村松晴嵐荘」と「原子力研究所」という二つの「日本初」を受け入れることにつながっています。

そして、古くから受け継がれてきたこのDNAは、「いいムラをつくろう とうかいむら」というブランドメッセージの中に今も息づいています。

今、私たちは――

では、先人たちが紡いできた歴史を受け継いだ私たちが、「いいムラ」をつくっていくためには、どうしたら良いのでしょうか。

近所の人にあいさつをしてみる、身近な人に「ありがとう」を伝えてみる、誰かの挑戦に「いいね！」と共感し、応援してみる、いつもと違う路地や普段は車で通り過ぎるだけだった道を歩いてみる、気になっていたお店の扉を開いてみる――。

きっと、特別なことをする必要はないのかもしれません。小さな「やってみよう」が、普段何気なく見ていたまちの違った一面や新たな魅力を見つけるきっかけの一つになるでしょう。

小さな「やってみよう」が積み重なり、まちの魅力を誰かに伝えたくなったとき――あなたはすでに、地域に真剣になっていることでしょう。誰かがつくったまちではなく、みんなでつくるまち。その中で暮らすことが、一番の幸せと言えるのではないでしょうか。

一人ひとり、幸せの形は違っていい。好きなことも、大切にしていることも、違っていい。そうした違いを認め合えるからこそ、東海村は温かいのです。

さあ、あなたも一歩踏み出してみませんか。

「いいムラをつくろう」ブランドメッセージ

完璧なまちなんてない。
だからこそ、暮らしやすいまちをみんなでつくるんだ。

東海村が好きだ。
そう言う住民が多いのは、
半径4㎞のコンパクトなまちで
海も里山も自然があって
最先端の科学技術があって
公園・病院・福祉施設が充実してて
都心へのアクセスもよくて……なんて村！

でも一番は
いろんな好きが集まって、
いろんな個性が混じり合い
いい感じのムラができていること。

もっといい村をつくろう。
あなたの色が、誰かの色と交わって
東海村は見たことない色になっていく。
その色で、思いで、いいムラをつくろう。

いいムラをつくろう
とうかいむら

